

遺族会への思い

湖西市遺族会 近藤伊織

太平洋戦争の開戦から2か月後、私は浜名湖畔片田舎の町医者の子として生を受けました。勝てる訳がない戦争に、父は1歳に満たない私を残してフィリピンに軍医として出征しますがどれ程心残りだったでしょう。その悲しみの中で母は肺結核に罹り、戦時中の事、ろくな治療も出来ず若い命を落としました。父は昭和20年9月、ルソン島北部の山奥からバギオに引き上げる途中風土病に倒れ、戦友を先に行かせたまま山中で消息を絶ちました。

私には父と母の記憶は全くありません。叔母達から断片的に聞いた両親の我が子への愛と、理不尽にも夫婦を引き裂かれた悲しみと辛さが、私が戦争を憎み遺族会を維持する原点となっている気がします。

5年程前の事です。市の賀詞交換会に出席した時、ある市議員にあなたは遺族会長の名札を付けているが何の遺族ですかと聞かれました。私は暫く絶句した後戦没者ですと答えましたが、行政に深く関わる市議でさえ戦争があった事も遺族会にも無関心なのが現実でした。

平和であった平成から新元号の令和に変わり激動の昭和が又一つ遠ざかりましたが、私達遺族は生きている限り戦後が終わる事はありません。集団的自衛権の閣議決定に続き憲法改正を言い続け、防衛費無制限の政府に私達遺族の気持ちが伝わっているとはとても思えません。兵力を拡大し自国の主張ばかりして相手を罵りあう国同士が平和に共存できる訳がないのです。世界の平和と日本国の存続の為に、遺族会としての考え、意見を政府に堂々と伝えてもらいたい。ただ黙っているだけの遺族会では遺族会の存在価値はありません。

戦争という狂気に翻弄され、残した家族の為に願ったこの平和な日本を私達の子や孫にどんな理由があろうとも残していかなければなりません。私は既に父と母の2人の命を足してもなお余りある人生を生きました。これからの余生は今の遺族会を大切に、戦没者の御霊に今日あることの感謝とご冥福をお祈りし、戦争を二度と起こさない平和な世の中の為に微力を尽くしていきたいと思えます。

(令和2年4月発行の静岡県遺族会報より)